

平成 23 年 4 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2010
 課題番号：18401032
 研究課題名（和文） バクトリアのギリシア都市の美術・考古学調査
 —ウズベキスタン共和国カンピール・テパ
 研究課題名（英文） Archaeological Investigation of an Ancient City in Bactria
 —Kampyr-tepa in Republic of Uzbekistan
 研究代表者
 芳賀 満 （HAGA MITSURU）
 東北大学・高等教育開発推進センター・教授
 研究者番号：40218384

研究成果の概要（和文）：

地中海文明、イラン文明、インド文明と中国文明が会う中央アジアにおいて、特にアレクサンドロス大王遠征の実証的研究を目的として、バクトリア地方のアム河河畔のギリシア・クシャン系の都市カンピール・テパを発掘し、その遺構や遺物から前4世紀から後2世紀までの同都市の変遷を解明した。ギリシアの神々ディオニュソスとアリアドネが表されたテラコッタ製遺物からは、この地までディオニュソス教が伝播しその信者が存在したこと、図像からはギリシア文明とインド文明が融合していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Ancient Greco-Kushan city in Bactria, “Kampyr-tepa”, on the right bank of Amu-river was excavated revealing the history of the city. This shed new light on the military campaign of Alexander the Great in Central Asia, which was followed by the propagation of Greek civilization into the Ancient Orient. By studying the way the Hellenistic art form spread globally and its local interpretations, it became clear that the region was a hub between the western, southern and eastern regions of the Eurasian Continent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,480,000	444,000	1,924,000
2010年度	320,000	96,000	416,000
総計	8,300,000	2,490,000	10,790,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：美術史、東洋史

キーワード：東洋史、西洋古典、古代ギリシア、古代ローマ、古代オリエント、中央ユーラシア、地理情報工学（GIS）

1. 研究開始当初の背景

中央アジアの古代バクトリアは現在のウズベキスタン、アフガニスタン、タジキスタンなどからなる地方である。そこは地中海世界、インド、中国を結ぶ結節点であり、この地でそれらの諸文明が融合した、東西文明の

世界的な十字路であった。

しかし現代世界ではバクトリア地方は先進国から遠い辺境にあたり、その研究は進んでいない。また学問の専門化が進んだ現在の状況においては、地中海世界・ヨーロッパを対象とする学問分野と、日本・アジアを対象

とする学問分野のはざまに、バクトリアを中心とする中央アジアを対象とする学問は陥っており、この分野の研究者は極めて少ない。

確かに幾多の困難を越え、従来、また現在も、バクトリア地方での美術・考古学調査研究は行われてはきたが、それは主に東方そして日本への仏教伝播の経路としての仏教学の立場からのものであった。それは当然重要であるが、真の東西世界文明の交流の様相を知るためには、西方の古代ギリシアの観点からのバクトリアの研究調査が不可欠である。

前4世紀後半にギリシアのアレクサンドロス大王がバクトリア地方にまで東征を行ったことは古代文献からは広く知られている。しかし実はその考古学的確証は長らく見つからず、やっと1965年にアフガニスタン北部でギリシア系都市アイ・ハヌムが見つかりフランス隊が発掘を開始した。しかしその後のアフガニスタンの情勢から現在その発掘は放棄されたままであり、バクトリアにおけるギリシア文明の研究の遅滞は著しい。

この現状を鑑み、古代東西文明の交流の実態を調査研究する為に、政情が安定しており、またこれまでグレコ・バクトリア関係の遺物や遺構の出土実績の多いウズベキスタンを対象地域とした。そして2005年夏に同国内のほぼ全域におけるジェネラル・サーベイを行った。その結果、グレコ・バクトリア起源と考えることができる都市遺跡(テパ)を、アフガニスタンとの国境のアム河(古代のオクサス河)右岸に特定できた。

2. 研究の目的

このアム河河畔の古代都市カンピール・テパの美術・考古学調査研究を行う。新たな遺構と遺物を検出することにより、ギリシア文明が東漸しオリエント文明と融合する様相を検証し、ユーラシア大陸の東西南の諸文明の交流の実態を実証的に明らかにすることを目的とする。

アレクサンドロス大王はバクトリアの首都バクトラ(現アフガニスタン領内)から、オクサス河を渡河して前329年にマラカンダ(現サマルカンド)を征服したことが古代文献から知られている。筆者はこの時に大王が渡河した地点にあたるのがカンピール・テパだと考える。バクトラからマラカンダへ行く際に最短のルート上に位置するからである。このことを検証し、大王の遠征経路の不明部分を明確にしたい。そして、大王襲来以前のバクトリア都市の様相を明らかにし、また大王による破壊の様相も明らかにする。

さらには、大王の時代以降の、グレコ・バクトリア王国時代のオクサス河の渡しを警備する機能をもった城塞都市としてのカンピール・テパの様相も明らかにしたい。

またクシャン時代のキャラバンの中継地

点としての都市と仏教信仰との関連も明らかにしたい。

これらの各時代のカンピール・テパの実態を明らかにして行く過程で必然的に、アレクサンドロス大王遠征以来の中央アジアにおけるギリシア文明受容の様相が明らかになる。ギリシア文明がアジアの文明に吸引されてゆく過程で最も強力なアジアの磁場となるものは、仏教である。特に造形の観点からギリシア文明と仏教の融合過程を検証する。

3. 研究の方法

発掘対象である古代都市カンピール・テパは、アム河(オクサス河)右岸に位置した東西750m、南北250mほどの範囲の城塞都市である。周囲を城壁で囲まれ、シャハリスタン(居住区)と中心部分のツィタデリ(城郭)から構成される

都市全域を直ちに発掘することは叶わないので本研究では、都市の性格を知る上で最も重要である都市中心部分のツィタデリを発掘する。

層位的には、2005年の事前の表面踏査からクシャン朝時代の層と考えることができる最上位の部分を検出することに努める。その上で、その下方のグレコ・バクトリア時代からセレウコス朝時代の層の検出も行う。

カンピール・テパの特にツィタデリは、その南側がアム河(オクサス河)の蛇行により浸食されテパの断面を露出している。これが同テパの発掘調査が緊急に行われるべき理由であるが、一方で、それは巨大トレンチを掘ることが妥当とされる理由でもあろう。テパの層位全体の把握の為に、多くの作業員を充てて、ツィタデリ東部の南側に表土層から無遺物層に至るまでのセクションを掘りたい。

発掘作業は芳賀、ルトヴェラゼ、イリヤソフが40人ほどの作業員を指揮してあたる。発掘された遺物は、発掘期間中は隊舎の倉庫で保管し、毎年度発掘期間後はタシケントまで輸送し、同市のウズベキスタン共和国芸術アカデミー芸術学研究所の倉庫で保管する。

一方で、広くバクトリア地方とその周囲の調査研究も行い、若干広い視野からこの地方におけるカンピール・テパの位置づけを考察する。

4. 研究成果

(1) 2006年度の成果

ツィタデリ西区のRoom 1, 5に相当する区画ではクシャン時代初期の層の直下が地山であった。したがって、少なくともここにはグレコ・バクトリア時代の都市はないことが判明した。この発見は、カンピール・テパにおけるグレコ・バクトリア時代の都市形成過程の研究に大きな進展をもたらした。

少なくともツィタデリ西端区域においては以下のことが判明した。クシャン時代初期には大きく都市プランが変更されている。II-Room 1 / Room 22, 14 の東を南北にはしるセクションから明瞭に判別できるように、この区域にはクシャン時代初期以降には流水によって流れ込んだ層（ナチョーキ）が堆積している。これはこの時代にはこの区域が一時的に放棄されたことを示している。その後カニシカ時代には、この区域は再び整地がされて、建造物がたてられている。カニシカ時代以降にこのテパは放棄された。

(2) 2007 年度の成果

ツィタデリの西区と東区の両方において、上から下に順に、「カニシカ時代の建造物が建立され、その直後にテパ全体が放棄された第1期」→「整地」→「灰層の時期」→「床面を1つ程しか伴わない短期間の第2期」→「第3期（その壁体上面が検出され始めた）」と、4つの時期にわたる変遷を認めることができた。このことから西区と東区が対応していることが判明した。つまりこの変遷はツィタデリ全体において見られたと考えることができる。

都市全域にわたって4つの時期を認めることができることから、そこに大規模な都市計画が存在し、つまりそれを施工できる政治的権力が存在し、そして施行しなければならなかった何らかの政治的・社会的理由の存在を想定することができる。

また西区の下層のピット埋土からパルティアの緑釉と思われる陶器片が出土した。これまでテパからはパルティアのコインだけでなく、パルティアの様式を呈するテラコッタも出土している。このテパとその領土が、一時期ではあるが一定期間にわたってパルティアの支配下にあった可能性も指摘できる。

(3) 2008 年度の成果

2006 年度、2007 年度の成果をさらに検証することができた。すなわちツィタデリ西端の西区とツィタデリ東端の東区の両方において4つの時期にわたる変遷を同様に認めることができ、つまり西区と東区が対応していることからこの変遷がツィタデリ全体において見られたと考えることができることが再確認できた。西端と東端で灰層が堆積している時期には、都市の居住区はツィタデリの東西から中央部に向けて収縮して、ツィタデリ中央部にのみ人々が住んだのであろう。

この年度最大の成果は、このテパの歴史が、少なくともセレウコス朝にまで遡ることが判明したことである。このようなテパは中央アジア全体においても極めて少ない。

但し、セレウコス朝時代の建造物が谷間に位置する一方で、これまでの発掘状況では、テパの西端と東端ではセレウコス朝時代あ

るいはグレコ・バクトリア時代に至らないで地山に達する可能性がある。もしもそうであると、セレウコス朝時代には、適地であると考えることが出来るツィタデリの上面には建造物がなく、その周囲の谷間に建造物があることになる。その理由の検討が必要である。まだ未調査のツィタデリ上面中央部分には古い層位が存在する可能性が高い。

(4) 2009 年年度の成果～テラコッタ製《ディオニュソスとアリアドネ》

ツィタデリの西地区部屋 22 を中心に調査を行った。この部屋を南北に走るセクションを精査し、改めて4期が確認された。

部屋 22 から出土した遺物であるテラコッタ製品について図像学的研究を行い、《ディオニュソスとアリアドネ》と同定した。以下にその成果を詳説する。

①テラコッタ製《ディオニュソスとアリアドネ》の概略

第3期に当たる、部屋 22 の北壁を構成するレンガの目地の中から出土したテラコッタ製品である。この遺物は2009年度の調査・研究でカンピール・テパ遺構の都市としての性格を如実に示すことが判明した。

本作品は前1世紀から後1世紀と年代決定できる。鋳型から造られており、表側に図像があり、裏側はほぼ平面で平滑である。下半分が破断し現存部は高さ5.5㎝横4㎝である。

本作品には互いに大胆に腕を回して互いの頭部を引き寄せ、今まさに接吻せんとする二人の人物が表される。このように動的な表現が特徴で、また複雑に交差する両腕と肩による奥行表現にも長けている。

一般に接吻する人物は男女であること、左人物はヌードの背中を見せ、飾りが豊かで、右上腕部に腕輪をしていることから女性で、右人物は男性であろう。テラコッタは上部分しか残らないがほぼ直方体なので全体も直方体であり、するとこの男女は共に立像であったと推量できる。

②図像の特徴-インド・ガンダーラとギリシア・ヘレニズムの融合

本作品の図像には、インド・ガンダーラの要素とヘレニズム的要素を認めることができる。

インド・ガンダーラの要素は以下である。頭部の表現は、男女ともその耳飾りの表現と共に、ガンジス河上流の Ahichchhatra から出土したスガ朝時代（前180-80年頃）のテラコッタ製《ミトゥナ》に類例をみることができる。この正面を向く二人の頭部をそれぞれ側面から表せば、本作品における表現となり、また額の紐に玉を通したような装飾、耳飾り、肩に掛かる衣も類似する。ガンダーラ美術にも類例を求めることができる。本作品の男性の髪型は菩薩像の束髪と類似する。女性頭部も同様であり、類似例としては、《パ

ンチカとハーリティ像》のパンチカ頭部を、さらには本作品の女性頭部には2個あるいは3個以上の丸い頭髪の塊があるので《賢者の子裁判》の女性像をあげることができる。後者の二人の婦人は共に、髪飾りはターバンかヘア・ネットなどで髪を緒さえ、余した房を頸の両側に垂らしている。以上から、頭部の図像はインド・ガンダーラに由来すると言える。また顔貌が威厳に満ちていることもインド・ガンダーラの様式に沿う。ヘレニズム造形にはない、それとは別種のインド的威厳を本作品の顔貌に認めることができるのである。

ヘレニズム的要素は以下である。本作品で女性がヌードの背中を見せていることは、ヘレニズム時代のギリシア美術に典型的な表現である。アフガニスタンからケートスに乗りヌードの背中を見せた女性像が表された石製半円形小皿が出土しており、この表現は東方で好まれていた。本作品の左人物の図像はこのネーレイスに典型的なポーズである。本作品の女性の右上腕部に環状の腕輪は、菩薩やインド美術にはないもので、アフロディーテなどのギリシア女性のものに由来する。相手の頭の後ろに手を廻す仕草もインドにはない。ミトゥナなどは背中などに手を廻すことはあるが、本作品のような表現はない。これはディオニュソスやアドーニスとアフロディーテなどのギリシアの図像に由来する。また、相手の顎の下に手を伸ばす仕草は、ギリシア世界で非常に類例の多い典型的な求愛の仕草の図像である。その求愛を受ける女性の代表としてアリアドネが挙げられる。

さらに特筆すべきは、この求愛図像が中国寧夏回族自治区固原市の北周時代貴族李賢夫妻墓（569年）出土のササン時代とされる銀製鍍金把手付水瓶にもあることである。3組の男女はトロイア戦争関連の図像であるが、その中でパリスがヘレネの顎に手で触れ求愛をしている。カンピール・テバが、このギリシア・ローマの図像が長安近辺にまで東漸するひとつの中継点であったことを示唆し、さらに瓶は器形からバクトリア地方で製作されたとされるが、本作品はその製作地説の蓋然性を高めた。

以上から、造形細部の図像、主に頭髪の意匠はインド・ガンダーラに由来し、愛撫の仕草、女性が背中を見せていること、腕輪、さらには奥行きのある多層的な空間表現などはギリシア・ヘレニズムに由来し、両者が混在・融合していることが指摘できる。

③図像学による解釈

本作品は何であるか。最も近い参考例は同じテバのツィタデリから出土した前1世紀頃とされる《接吻する人物像》である。全身が残り、右人物は体形から女性でやはりヌードの背中を見せ、角状の物がある被り物をつけ

る。これを発掘者ルトヴェラゼ氏はミトゥナとする。

インド・中央アジアの多くの類似例から、これらの作品が単なる玩具である可能性は極めて低く、何らかの文化的・宗教的機能を有していたと考えられる。本作品が置かれるべき宗教・文化的背景は、大きく4つ考え得る。ゾロアスター教、古代インド・ガンダーラ（ミトゥナ神など）、ギリシア・ローマの神々、仏教である。本作品はこれらのいずれかの宗教的コンテクストに於ける一種の「念持仏」であろう。

ゾロアスター教においては、善人の靈魂には死後3日目か4日目の朝に15歳位の美しい処女ダエーナーが導師として迎えに来る。すると本作品の男女は、善人（男）と処女ダエーナーと解釈できる可能性もある。しかしダエーナーは古『アヴェスタ』に言及がなく、中世パフラヴィ語経典で初出するので、紀元前後にダエーナーの概念が実在していたか不明である。したがって現段階では積極的にゾロアスター教による解釈は進めるべきではない。

古代インドの観点から解釈し得るのはまずミトゥナである。一組の男女が肩を寄せ合う愛の場面はインド美術が早くから好んだテーマであり、従来インド美術史家は男女のカップル像をミトゥナと同定し、性愛図もそのミトゥナ神の発展形とし、これらは「豊饒多産」を象徴、あるいは「聖人が欲望を克服すること」、「愛欲が悟りの妨げになることへの警告」などを暗示・示唆すると解釈されてきた。しかし、ミトゥナは相手の体に腕を廻すことはあっても正面を向いており、本作品におけるような抱擁・接吻はしない。樹霊ヤクシャとヤクシー、あるいは双身毘沙門も同様である。ゆえに本作品はミトゥナ、ヤクシャとヤクシーではない。

ギリシア・ローマ世界では、ヴルチ出土の前4世紀中頃以降の《夫婦同衾抱擁図》に見るように、男女の情愛を表現する伝統は古くからあった。しかし接吻の図像が確立し、ある一定の大きさ以上の群像彫刻において接吻が表現されるのはヘレニズム時代からである。

《エロスとプシュケー》が、その最も有名な例であり、原作は前3世紀初頭から前2世紀末である。以後、接吻というものがギリシア彫刻の造形テーマとなった。しかしここで表されているのは、子供らしい肉体表現による、初々しい愛の表現であり、カンピール・テバからの作品にはなじまない。

当然ながら愛の女神アフロディーテにも接吻の図像が認められ、美少年アドーニスとの事例がある。しかし意外にも恋人アレスはアフロディーテに接吻することはなく、軍神はいきなり乳房に手をやる。アフロディーテ

とエロスの事例もあるが、これは母子関係における情愛の仕草であり、エロス行為ではなく挨拶としての接吻である。パンとニンフの事例もあるが極めて少ない。

ディオニュソス関連が、接吻する図像のもうひとつの代表例であり、神本人とアリアドネ、そして眷属が表される多くの事例がある。ヘレニズム時代の前4世紀後半から出現し、イタリア半島、エトルリアでの出土例も多い。帝政ローマ時代にもチュニジアやエジプトに至るまで広く事例が認められる。アッティカ出土の前4世紀後半頃のテラコッタ製の《ディオニュソスとアリアドネ》では女が男の頭の後ろに手を廻して接吻をする。アリアドネが正面を向いているものとしては、ヴィラ・ジュリア蔵の前400-375年頃のキュリクスやフィラデルフィア大学蔵の前375-350年頃のキュリクスなどの事例がある。ローマ時代にもディオニュソス/バックスとアリアドネが寝台や車の上で体や腕を互いに交差させる事例はある。カンピール・テバの事例と最も図像的に類似しているのは、トスカネッラ出土の前4世紀後半の鏡の背、トゥスカニア出土の前300年頃の鏡の背の事例である。

これらの図像と肉体表現の類似から、カンピール・テバの作品における大人の男女の図像は、ディオニュソスとアリアドネであると結論づけることができる。

④遺物からみる本遺跡の性格～渡河点に位置し東西南北を結ぶ沙漠の隊商都市

以上のことから、最も素直な推論は、バクトリア地方のこのカンピール・テバで土着のディオニュソス教が信仰され、本作品は、ディオニュソスとアリアドネの聖婚（ヒエロガモス）を表し、ディオニュソス教信者の祭具であったとする考え方である。

特にフェルガナ地方からバクトリア地方にかけては、ディオニュソス信仰の背景として、この時代に既に葡萄酒がよく飲まれていたと考えられる。特にカンピール・テバはシルクロード上の重要な渡河点に位置する裕福な隊商都市で、部屋22に見るようにツイタデリからは数多くの大瓶が検出されており、それらは葡萄酒の貯蔵用であった可能性が高い。

またディオニュソスは、ギリシアでは海上交通における、特に海賊に対する守護神でもあった。バクトリア地方においては砂漠という海を渡るキャラバンにとっての守護神となり、隊商都市カンピール・テバにその宗教が存在したのであろう。またディオニュソスは水の神でもあるので、オクサス河の渡河点でもあったこのテバで祀られたと考え得る。カンピール・テバ遺跡はギリシア系文明の栄えた都市であったこと、渡河点に位置する隊商都市であったことが、ディオニュソスとアリアドネの像から再確認された。

(5) 小結

以上のように2006年度から2009年度にかけてツイタデリの発掘調査および研究を続けてきた。

その結果、徐々にこの都市の形成の過程とその性格が判明した。

この都市にはギリシア・ヘレニズム文明がインド・オリエント文明と融合しつつ存在していたことが遺物から判明し、一部ではセレウコス朝時代にまで層位を掘り下げた。

中央アジアにおけるギリシア文明の研究およびそのオリエント文明との交流の諸相を実証的に研究するために極めて重要な遺跡である。

しかしこれまでの調査研究は、オクサス河渡河点に位置するこの重要なシルクロード都市遺跡研究のまだ始まりに過ぎない。今後もこのカンピール・テバの発掘調査を続けてゆく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

① 芳賀満「中央アジアのギリシア系都市を掘るー2009年度ウズベキスタン共和国カンピール・テバ遺跡調査と同遺跡出土「ディオニュソスとアリアドネ」テラコッタ」『考古学が語るオリエントー日本西アジア考古学会西アジア発掘調査報告会報告集』17, 2010.3, pp.136-141. (査読無)

② 芳賀満「俗と聖の接吻ー中央ユーラシア新出の「ディオニュソスとアリアドネ」テラコッタを中心として古代地中海世界から中国まで」『西洋美術研究』15, 2009, pp.2-25. (査読無)

③ 芳賀満「ウズベキスタン共和国カンピール・テバ」日本西アジア考古学会『古代オリエントの都市遺跡』2009, pp.13-19. (査読無)

④ 芳賀満、古庄浩明、内記理「ウズベキスタン共和国カンピール・テバ遺跡第3次発掘調査」『西アジア発掘調査報告会報告集』16, 2009, pp.125-130. (査読無)

⑤ 芳賀満、古庄浩明、宇野隆夫、相馬拓也「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テバ第2次発掘調査」『西アジア発掘調査報告会報告集』15, 2008, pp.139-145, 日本西アジア考古学会 (査読無)

⑥ 芳賀満、古庄浩明、宇野隆夫、相馬拓也「ウズベキスタン共和国カンピール・テバ第2次発掘調査速報(2007年度)」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』14, pp.91-97. (査読無)

⑦ 芳賀満「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テバ第1次発掘調査」『西アジア発掘調査報告会報告集』14, 2007, pp.95-100, 日本西アジア

ア考古学会（査読無）

⑧ 芳賀満「ウズベキスタン共和国カンピール・テパ発掘調査速報（2006年度）」『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』13,2006,pp.17-20.（査読無）

⑨ 芳賀満「人のすまい、民族のすまいー中央アジアのウズベキスタンでの美術・考古学予備調査を踏まえて」『京都造形芸術大学比較芸術学研究センター紀要』1,2006,pp.136-146.（査読有）

⑩ 芳賀満「ウズベキスタンの古代都市ー2005年度のジェネラル・サーヴェイから」『京都造形芸術大学紀要』10,2006, pp.64-89.（査読有）

〔学会発表〕（計12件）

① 芳賀満「ユーラシア大陸における地中海文明のフロンティアの諸相～主に造形芸術の観点から」（地中海学会第34回大会シンポジウム「フロンティア：周縁から中心か」）2010年6月20日（於東北大学）

② 芳賀満「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テパ遺跡第4次発掘調査」日本西アジア考古学会西アジア発掘調査報告会2010年3月28日（於古代オリエン特博物館）

③ 芳賀満「古代オリエントの都市遺跡ー中央アジアのギリシア系都市を掘る」日本西アジア考古学会2009年4月11日（於天理大学附属天理参考館）

④ 芳賀満、他「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テパ遺跡第3次発掘調査」日本西アジア考古学会西アジア発掘調査報告会2009年3月15日（於古代オリエン特博物館）

⑤ 芳賀満、他「ウズベキスタン共和国カンピール・テパ第3次発掘調査速報（2008年度）」、ヘレニズム～イスラーム考古学研究会2008年11月15日（於金沢大学）

⑥ 芳賀満「抱き合う二人ーウズベキスタン共和国カンピール・テパ出土のテラコッタ像について」科研「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究」第2回研究会2008年7月6日（於龍谷大学）

⑦ 芳賀満「中央ユーラシアの都市と藝術を巡る文化交流ーウズベキスタン共和国カンピール・テパ2007年度発掘調査から」2008年6月10日（於京都造形芸術大学比較芸術学研究センター）

⑧ 芳賀満、他「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テパ第2次発掘調査速報」日本西アジア考古学会発掘調査報告会2008年3月16日（於古代オリエン特博物館）

⑨ 芳賀満、他「ウズベキスタン共和国カンピール・テパ第2次発掘調査速報（2007年度）」ヘレニズム～イスラーム考古学研究会2007

年11月11日（於金沢大学）

⑩ 芳賀満、他「ウズベキスタン共和国カンピール・テパ第1次発掘調査（2006年）」日本西アジア考古学会第12回大会ポスター・セッション発表2007年6月9,10日（於天理大学）

⑪ 芳賀満、他「中央アジアのギリシア系都市を掘るーウズベキスタン共和国カンピール・テパ2006年度発掘調査速報」日本西アジア考古学会発掘調査報告会2007年3月4日（於古代オリエン特博物館）

⑫ 芳賀満「ウズベキスタン共和国カンピール・テパ発掘調査速報（2006年度）」ヘレニズム～イスラーム考古学研究会2006年10月21日（於金沢大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

芳賀 満 (HAGA MITSURU)

東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：40218384

(2) 研究分担者

岡田 文男 (OKADA FUMIO)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：60298742

内田 俊秀 (UCHIDA TOSHIHIDE)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：30132822

(3) 連携研究者

エドヴァルド ルトヴェラゼ

(Edvard Rtveldadez)

ウズベキスタン共和国芸術アカデミー・芸術学研究所・教授

研究者番号：なし

ジャンガル イリヤソフ

(Jangar Ilyasov)

ウズベキスタン共和国芸術アカデミー・芸術学研究所・主任研究員

研究者番号：なし